# 人生100年時代をデザインする

竹山に暮らして

石塚 雅明

# 目次

表紙画　浦　一也
イラスト　石塚　雅明
装幀　千葉　晋也

ことのはじまり……1
作業小屋からずっと……9
最初の竹山の日々……17
バトンタッチ……27
三度目の危機を超えて……35
竹山というところ……43
この土地について……51
この土地の植物たち……59
竹山を食べる……65
わたしたちの自給自足……73
外にかまどをつくる……81
薪をつくる……89
木熊をつむ……97
撹乱……105
川と池を掘る……113
水辺の世界……123

目次

地図をつくる……131
一年通観……141
千客万来……149
鳥たちの気持ち……159
雪と暮らす……167
春はいつから……175
春から夏そして秋……183
雑草という草……193
ワインのブドウを植えてみる……201
あるものでつくる楽しみ……209
炊事当番……221
老いを生きる……231
酒と温泉の日々……239
竹山へのお返し……247
竹山に暮らして……255
おわりに、そして……263

# ことのはじまり

ここ「竹山」に暮らし始めてもう五年になる。

三十五年経営してきた事務所を、優秀な後継者に恵まれたことで事業承継をしたのが二〇一七年。それからご隠居を決め込み、今の暮らしがはじまった。その間に年齢も七十才になってしまった。早いものである。思い立ってここでの暮らしについて書いてみることにした。それがこの本である。

「石塚さんは今、どんなところに住んでいるんですか？」と聞かれると、常に「千五百坪の土地を手に入れて、森に囲まれた暮らしをしているんです」と答えている。その「千五百坪」と言うときに、自分の鼻の穴がぷくっと広がってしまうのは、ご隠居としての悟りの境地には程遠いということか。

ところがこの「千五百坪」と「森に囲まれた」というのは実はあやしい。土地を購入するときに言われたのは「千五百坪」だったが、契約の際に確認した登記簿によれば「千四百九十九坪」で一坪足りない。さらに境界測量の結果をみると「千四百九十八坪」で、どんどん減ってくる。これでは「千五百坪の土地を手に入れ・・・」と鼻を膨らませるのも憚られ、声も小さくなってしまう。

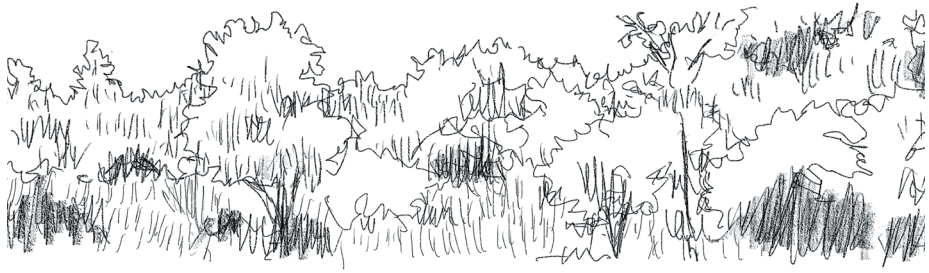
この事態を神様がかわいそうに思ってくれたのか、電柱の立て込み工事に来た業者の作業車がぬかるみにタイヤを取られて脱出しようとした際に我が家の境界石を倒してしまうという事件がおきた。業者は早々に境界石の復元をしてくれたのだが、その際の測量結果がなんと「千五百・〇一坪」となった。これで堂々と胸をはって鼻も膨らませて「千五百坪の土地を手に入れ・・・」と言えるようになったという次第。

もうひとつの「森に囲まれた」というのはもっと怪しい。

いわゆる地域森林計画に位置づけられた森林に面しているのは敷地の一面だけで残りの三面のうち二面は人が住んでいるお隣さんの土地である。いわゆるポツンと一軒家とは程遠い。それでも家の四周は高木が茂り、ほとんど木々の緑しか目に入らない。気分は「森に囲まれた」として嘘ではない。ただ、冬になるとほとんどが落葉樹なので木々の間からお隣の家が丸見えになる。それでも家と家の間は六十ｍくらい離れているので森に囲まれた気分はかろうじて維持される。

実は、この土地の購入の決め手となったことの一つに、そのとき自宅のあった札幌の都心から車で高速道路を使えば三十五分で着いてしまうという手軽さがあった。いろいろ周りの環境を知るにつけ、スーパーは車で二十分ほどの範囲に大小六軒もあり、おまけに同じ範囲に大規模なアウトレットモールもある。我が家に欠かすことのできないセンスが良い品揃えの酒屋も二軒ある。歩いて行ける距離には鹿肉専門のレストランや、美味しいハムやソーセージを入手できる店、それに絶品のパン屋もある。さらに言えば国内外にひとっ飛びの空港も三十分ほどで着く。そう、極めて便利なところなのだ。

そんなところで「千五百坪の土地での森に囲まれた（気分になる）暮らし」ができることになろうとは。きっかけは、隣家の友人のひと声だった。



窓からの眺め

もう随分前からになるが、家族ぐるみで親しくさせていただいていた、妻の友人のお宅に年に何度かお邪魔させていただいていた。別荘のように使われていたけれど、とても広い庭に色とりどりの草花をセンス良く配し、赤白の葡萄の棚や、栗やプルーンなど実のなる木もたくさんあり、「なんとかの庭」という趣だった。おうちもさすが建築家と思わせる品のある佇まいで、とても心地よい時間を過ごさせていただいていた。冬に訪れる鳥たちを間近に見られるのも驚きだった。

そんなお宅を久しぶりに訪ねたのは六年前のちょうどゴールデンウィークの頃だったと思うが、ご主人が突然「隣の土地が売りに出ているみたいだけど、ここは市街化調整区域なので、資材置き場か廃車置き場などにされたら困るんだよね。石塚君、買わない？」と。

それが今暮らしている土地なのだが、そのときは、どうも話の筋が自分ごととして思えなかった。確かにお隣が資材置き場などになったら、それも地形的に一段低い土地なので見下ろせば丸見えになり困るだろうけど、それで困るのは私ではない。笑ってすまそうとしたが、なんせ暇なゴールデンウィークのときだったので、敷地を探検しようということになった。他人の土地に勝手に入るのだから探検ごっこで済まされることでもないのだが、とにかく背丈ほどもある草が鬱蒼と茂っていて人は住んでいないのは明らかな荒地で、まあ、いいだろうということになってしまった。

草花に囲まれた隣人の家



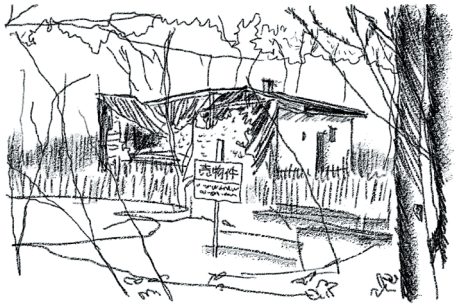


入ってすぐのところは笹薮で、大きな木が何本も生えていた。なかには朽ちかけた大きな木もあり探険感はかなりのものであったと記憶している。その先には春先だったのでヨモギがいっぱい生えていたが、同時にガマの姿も増え始め、足元は一歩踏み出すとズブッと沈む状態に。要は完全な湿地状態。地面に目をこらすと水たまりがあちこちに見え、油のような虹模様の膜が浮かんでいた。かなり遠くには、屋根が落ちかかった廃屋があるのも見えた。

もし仮に私が買ったとしても、資材置き場か廃車置き場にするくらいしか思いつかないような、そうするにしても大変そうな土地で、ましてや住むなどということはとても考えられなかった。それなのに、お隣に住んでいるご主人の親戚夫妻も「住まなくても、いろいろな楽しみ方がきっとできるよ」と無責任に加勢してくる始末で、まるで原野商法の押し売りにあったようだった。

その後も、そこを訪ねるたびに「買おうよ」「また見に行こうよ」と誘われ続け、ある日「先日、建設業者のような人が見に来ていたので聞いたら、ログハウスの資材を置く場所を探しているって言っていた。いよいよ危ないね」と。危ないのはこっちなのだが、とりあえず、敷地に立ててあった不動産屋の看板の連絡先に電話をしてみることになってしまった。

会って話を聞いてみると、広さは千五百坪あり、市街化調整区域の指定前に建った家があるので、今でもその一・五倍の面積の建物であればつくることができ、住むこともできるとのこと。




廃屋と売物件の立て札

その土地には春に続いて、夏、秋と何度か冒険侵入したことになるのだが、その間、話を持ちかけた夫妻が離れとして使っていた小さな建物をゲストハウスとして使わせてくれた。それが良かった。あいかわらずひどい湿地なのだが、季節ごとに表情をどんどん変えていく姿をじっくり観察することができたのは新鮮であった。いつの間にか訪れるのが楽しみになり、秋には、まだ名前も知らない草花を両手いっぱいに摘み取り、大きな花瓶に差している自分に驚いた。

私より冷静な判断ができる妻も、どうも気持ちが傾いて来たようで、土地を見に行くだけでなく札幌の自宅近くの植物園にある湿地園を一緒に見に行ったりして、湿原を楽しむシミュレーションをするようになってしまった。

私としてはそのころ、たまたま仕事で伺った小さな村や町で、大変だけれど楽しく誇りを持って暮らしている方々にたくさんお会いすることがあったのも背中を押すことになったのかもしれない。

T村を訪ねたときの話も忘れられない。酒席で副村長から「まちなかの便利なところに移住促進住宅の分譲をはじめたがいま一つでどうしたものか」と投げかけられた。酒の勢いもあって「村の良さに惹かれて住もうとする人は、まちなかの便利なところなど求めていないと思う。もっと自然に囲まれた・・・」と決めつけてしまった。そうしたら副村長「それなら石塚さん、二万坪の土地があるけど買わないかい。川も流れているよ」と返してこられた。「そんなお金は・・・」と尻込みすると、「二万坪、二千万円でどう」と畳み掛けられた。

私が摘んできた草花





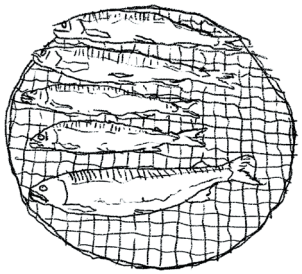
清水の舞台から飛び降りるつもりで有り金を叩けばまったく手が出ない額ではないのにびっくりした。もちろん買いはしなかったが。

隣人の隣人、つまり話を持って来たご主人の親戚夫婦だが、その存在も大きかった。何度か会ううちにとても人柄の良いお二人で気に入っていたのだが、あるとき、ご主人が「川で鮎を釣って来たので、一緒に食べませんか」と声をかけてくれた。鮎は香魚とも書くが、天然の鮎はひと噛みすると香りが口から鼻へといっぱいに広がり、思わずため息が出る美味しさだった。妻と「この土地を手に入れると、毎年、鮎を食べることができるのかな」と頷きあったのが思い出される。

価格交渉をしたら一千万円を切るまでになったが、決して安い買い物ではない。それも野遊びのために。

だが、ほどなく購入することを決めてしまった。今から思えば、なぜ、こんな荒地を買うなどという決断をしたのか不思議である。が、そういうことになってしまったのだ。いろいろ決断の理由をあげてみたが、どれも決定打と言えるものはない。将来の暮らしを冷静に比較検討した結果とか理詰めの判断ではなかったのは確実だ。きっと、私たちの心をぐっと捉えて離さない何かがあったのだろう。

この決断が重要な意味を持っていたことを気づくのはもう少し先になるのだが、その話はのちほど。



私たちの気持ちを押した鮎の炭火焼

# 作業小屋からずっと

土地を購入したのがその年の十一月の末だったので、冬の間は野遊びをおあずけにして、春になったらどう楽しもうか妄想に浸ることにした。

今までのように友人に甘えてゲストハウスをそのつど貸していただくのは気がひけるので、ちょっとした作業小屋を建てようということになった。幸いにしてここは市街化調整区域の指定がされる前に住宅用に建物が建てられていたので、住宅が建てられる土地なのだ。

まず、作業小屋は土間がいいねということになった。

当然、手を洗ったりする水は必要だし、

お茶を入れる程度のお湯は沸かせた方が良い。

トイレもいちいち隣に借りに行くのも悪いし

六十m離れているのも不安なので必要だよね。

毎回、日帰りもあわただしいので

泊まれるように簡単なベッドもあった方が良いね。

外作業をして汗をかいたまま寝るのはどうかな

シャワーぐらい浴びられるようにしたいな。

泊まったときの食事はどうする?。

こうなってしまったら考えは後戻りできなくなる。急なメールがきたり、資料をつくらなければならなくなったときのために、小さくても良いから仕事スペースが欲しいとか、やれ冷蔵庫はあった方が便利だとか。





自然に囲まれて野遊びを楽しめる小さな作業小屋というイメージはどこかに消えてしまって、気がつくと、まちなか暮らしの便利さをそのままコピー&ペーストしたような「家」になってしまった。それに、田舎暮らしの本に出て来そうな薪ストーブ、それもオーブン付きのが良いなどと、料理をつくりもしない私が言い出す始末。

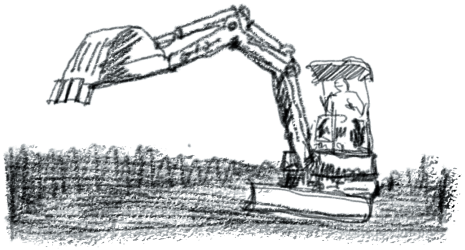
妻は、しきりに「こんな湿地に家を建てるなんて身体を壊すのじゃないか」と心配したが、「週末に立ち寄るだけだから」と説得した。

それでも、「なんでも一人大工」の知り合いに土地をみてもらったら「まず、中古のユンボを買いなさい。そしてできるだけ多く暗渠排水(あんきょはいすい)を入れなさい。それからだね」とのアドバイス。野遊びをするにしても、それだけ手強い土地だということだ。妻は、私が「ユンボ」のところで目がキラッと光ったのを見逃さず「そんなもの買って、いったいどこに置いておくの」と釘をさされた。ただ、頭の中ではユンボなる小型重機を自在にあやつりながら溝を掘り、暗渠排水を埋めていく自分を想像して悦にいっていたのである。

なんせ、土地は千五百坪あるので、どんなに建物が大きくなっても敷地に収まらないということはないし、建物も自分が良ければいいので徹底的にローコストでいけばなんとかなる。

と、思っていた。

それが大きな間違いであることに気づくのにそう時間はかからなかった。



ユンボの幻影

妻は長年自分で建築設計事務所をやっていたので、私が考えていることに無理があると薄々気づいていたと思うのだが、ここで水を差してはかわいそうと思ったのか、成り行きを見守る姿勢でいてくれた。

それでも、市街化調整区域のこの土地に住宅を建てることができるという証明書をもらうにあたっていろいろ調べてくれていた妻の顔つきが険しくなってきた。

以前、ここに住宅を建てた人は、千五百坪のうち百坪を建築敷地として建てていたので、新築することのできる敷地はその百坪の範囲に限られるというのだ。千五百坪のどこに建てようかといろいろ妄想していたのが一挙に現実に引き戻された。

さらに悪いことに、その敷地は公道に面していなかったのだ。道のように見えるが細長い私有地で、それもたくさんの方の共同名義になっているというのだ。その私有地は「みなし道路」とされていて、建物を建てる際に敷地は道路に接していなければならないという条件には適合するのだが、公道ではないのでそこを通行して良いかどうかは土地所有者の同意をもらわなければならないというのだ。そこが使えないとなると公道に面したところからその敷地まで自分で道をつくらなければならない。一大事である。

幸い道の土地を所有されている方はみなさん親族で、窓口になっていただいた方が工事やその後の通行に使ってかまわないと言っていただけたので事なきを得た。ただ、工事用道路として使うには重量車両の通行に耐えられないこともわかり、二百m分の道路の舗装工事をしなければならなくなった。

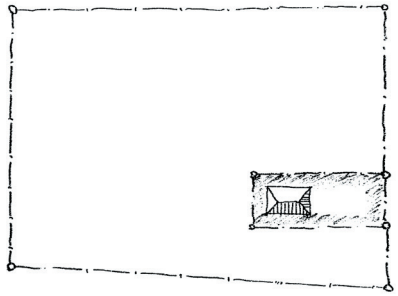
さらに地盤の調査をしたら、杭を打たなければならない状態だそうだ。作業小屋と思っていたのが、杭を何本も打つ豪邸のような建物になってしまった。木造のほとんど平屋の建物なのに。

さらにこれはすでにわかっていたことだが、その廃屋には上下水道も電気も来ていない。水道の本管までこれも二百m分自分で管を埋めなければならない。下水はちゃんと浄化槽を通した水でなければ川に流すことができない。電気は公道までは電柱を建ててくれるのだが、そこから敷地まで距離があるので敷地内に自分で電柱をたてなければならないとのこと。

後々、建築の計画が固まって工事費の見積もりをとったら、建物本体はローコストで頑張っても、目に見えないところに思わぬお金がかかることがわかった。妻曰く、「この目に見えないところの工事費で、ベンツが買えたね」

とりあえずその年は、雪のなかにぽつんと建っている廃屋の写真を撮ることにした。廃屋はその冬の雪で潰れてしまってもおかしくないくらいの状態だったので、確かにそこに住宅が建っていたという証拠写真を残しておかなければ、市街化調整区域で建物を建てることもできなくなる可能性があったのだ。

ちょっと夢がしぼんだが、正月休みは建物のアイデアをいろいろ出し合い妻が図面を引き、私は模型をつくることに費やした。



建てられるのは敷地の一部

今にも崩れそうな廃屋

プランを考えるのは楽しかった。

なかでも敷地にどのように建物を配置するかは結構考えた。土地は東西を対角線にしたほぼ正方形。その東隅に近いところに建物を建てられる敷地がある。その場所から敷地内の木立をもっとも広く見渡せるように北西に面して南北に長い建物にしてみた。北や西に面して窓を大きく取るのは住まいとしてどうかとも思うが、太陽の光をいっぱいに受けた木立を見ることができるのだ。建物の向きを決めたもうひとつの理由は、小さな二階の作業部屋から美しい姿の恵庭岳を真正面に見えるようにしたかったからだ。航空写真を手がかりに窓が山に面するように建物を配置した。建ってみるとぴったりの角度だったのだが、山を見る視線のちょうど途中に常緑のトドマツの大木があり山を隠してしまうことがわかった。計画的配置といっても私の場合はその程度ということか。

建物のプランもいろいろ考えてなかなか決まらなかったが、そのつど家具付きのドールハウスのような模型をつくって検討した。家具はテーブルや椅子はもとより、私にとっては重要な薪ストーブと煙突まで細々とつくってしまった。その時間が楽しかったのは言うまでもない。

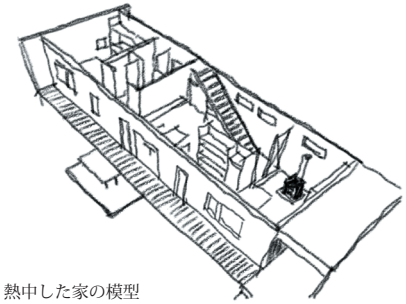
最終的にほぼワンルームのコンパクトな平家にちょこんと二階が乗ったかたちに収まったが、結局、「作業小屋」から「ずっと住めそうな家」になってしまった。建築費もまっとうな額になってしまったのは言うまでもない。老後は便利なまちなかのマンションにと思っての蓄えを全て放出してしまったのは、今から考えると大胆な決断だったのだが、何かに憑かれたかのように工事契約書に判を押してしまった。それがどのような意味を持っていたのかを気づくには少し時間がかかるのだが。

なんだかんだあったが、雪解けと同時に工事が始まった。

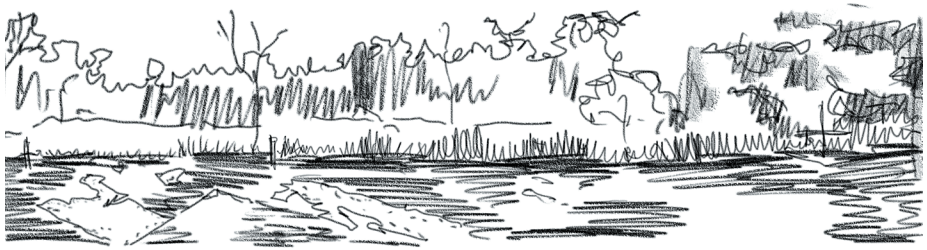
工事で重要なのは敷地の排水だった。以前ここに住んでいた方も排水には苦労していたようで家の近くに素掘りの溝が延々と掘られていたが、それが役に立っていた感じはまったくなかった。よく敷地を調べると、その溝とは別に敷地際に立派な側溝跡が見つかった。跡と書いたのは、長い間放置されたことで、すっかり土砂に埋まって水路の役割を果たしていなかったのだ。その側溝は隣の敷地の側溝とつながっているのだが、隣とは高低差が三mほどあるので隣から流れ落ちた水が私たちの敷地に広がってしまっていたのだ。

側溝の復旧工事をしてくれた人の話では「土砂がまるで扇状地のように広がっていたよ」とのこと。その例えで言えば、家を建てようとしたところは扇端から先の低湿地になる。妙に納得。

側溝はもとの材料を生かして見事に復元され、ずっとそこにあったように風景に馴染み、流れる水も綺麗だった。でも急に敷地の水が引くわけではなかった。建物の工事が始まったときに見に行ったら、建てる場所を示す目印杭が水浸しの泥のなかにぽつんとあったのは、今でも鮮明に覚えている。でも、ここまで来れば先に進むしかなかった。



熱中した家の模型



工事現場は水たまりの中

# 最初の竹山の日々

十月十七日、ようやく建物が完成し引き渡しとなった。その前の確認検査では外壁の板に大きく欠けた部分が見つかり、なんという工事の仕方かと腹がたったが、あとでご近所に聞くとキツツキの仕業だったとわかった。向こうにしてみればナワバリに断りもなくつくられた大きな箱を調べてみたということなのだが、とんだとばっちりを受けた工事業者さんには申し訳なかった。引き渡し後に、新築特有の匂いを避けて換気のために窓を開け放していたら、突然、一羽の小鳥が部屋に飛び込んできて大騒ぎになった。幸い壁に激突することもなく無事に外に戻って行ったが、確実に彼らの世界に侵入したのはこちらだと実感させられた。

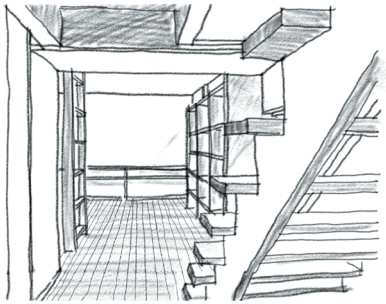
完成までにはいろいろあったが、それはおいておこう。

とにかく完成したのだ。

ただ、やることはいろいろあって、まずしなければいけなかったのは、フローリングのワックスがけだった。とにかく工事費用を切り詰め自分たちでできることはやるという方針だったので、がらんとした部屋に買ったばかりの布団を敷いて、三日がかりの仕事になった。

ダイニングテーブル作り、カーテンレールの取り付けなど細々としたことがいろいろあり、それらはみな週末作業だったので、なんとか落ち着いたのは一ヶ月半後ぐらいであった。

もう十二月も半ばになり、そろそろ雪の季節かと思っていたらドカンと来



なんとか完成





た。自宅のある札幌の街中も結構雪が積もっていたが、除雪が行き届いていて車は動かせたので週末は竹山でと出かけることにした。来て見ると六十cmの積雪。幹線道路から家に入る道はとても車で行くことができない。隣家の友人宅に車を置かせてもらって、家まではパウダースノーをラッセルしながらようやくたどり着くことができた。翌日は晴れて時々雪が降る程度に収まったが、とにかくやらなければならないのは雪かきだ。

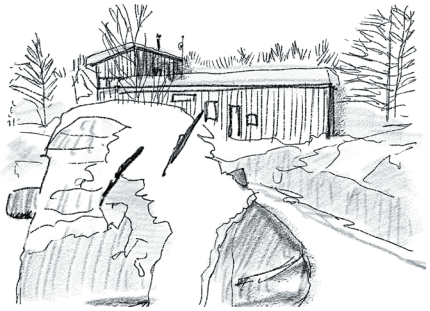
だが、とにかく広い。悪戦苦闘していると見かねた隣の見知らぬ方が小型のユンボで助けてくれた。この方、かなりの高齢とお見受けした。住人ではないのだが、長らくここで働いていて昔のことも詳しく、後々いろいろなことを教えてくれることになる。

幹線道路から家までの二百mの道の除雪まではさすがに手が出なかったが、ここは、隣近所で除雪組合をつくっていて、市から除雪のための補助をいただき自分達で除雪業者にお願いする仕組みになっていた。さっそく組合に入れていただき、ほどなく大型の除雪車がやって来てくれて、なんとか車も動かすことができるようになった。

十日後に竹山に来たときも、また車が雪で立ち往生してしまった。これでは来年早々に四駆の車に買い換えなければならない。

また、お金がかかる。

そんな感じで最初の竹山の日々は始まった。



大雪に車が埋まって

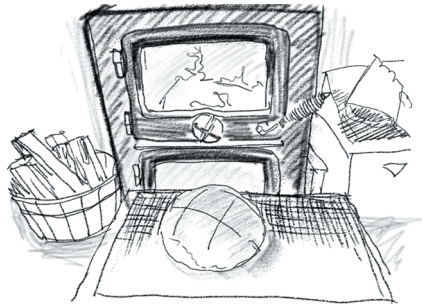
そんな竹山の日々も、大変なことばかりではなかった。

当初の作業小屋のイメージが残っているのは、玄関から入ってすぐの八畳ほどの土間だけだが、そこに薪ストーブを置いた。それもオーブン付きで料理ができる。窯開きは十二月三十日で丸鶏と芋を焼いてみたが、これがなんとも程よい火の通り具合で美味しかった。窓から外を見ると木々の枝ひとつひとつに新雪が積り一面真っ白な世界が広がる。土間には薪ストーブの炎がオレンジ色の光をゆらゆらと落とす。そんな風景に浸りながらワインと鶏肉を味わう時間がゆっくり流れる。

翌日の大晦日には、くるみ入りのパンを焼き、またワインをおともに豚肉のソテーと野菜を煮込んだスープで、はじめての竹山での年越しをした。

年が明けてもすぐ帰る気にはならず、長めの正月休みをとって九日まで竹山にいることにした。

年末から雪混じりの日が続いていたが、正月二日になってようやく暖かな日差しが訪れた。それを待っていたかのように小鳥があちこちの枝を行き来しはじめ、雪原をエゾリスが横断するのを目にすることができた。小鳥たちはせわしなく飛び回るので、その種類を見分けることは難しかったが、買ったばかりの鳥類図鑑と双眼鏡を駆使して、コガラとカケスとアカゲラは何とかわかった。今から見るとコガラとしたのはハシブトガラではなかったかと思うが、まあ、そのような間違えはその後も山のようにある。



薪ストーブでパンを焼いた





鳥はまだましだが、木となるとさっぱりである。これは絶対に間違いないと言い切れるのはシラカバぐらいで、あとは、小さな木と大きな木ぐらいの見分けしかできない。私でもわかる木は庭木か街路樹に使われる木で、そのような木はほとんど見かけないのだ。それに、葉を落とした冬であればなおさらであった。それでも、風の通り道にあたった木の枝からサラサラとした雪の小さな雪崩が舞い散る姿は見ていて飽きなかった。それはまるで誰かがいたずらして枝をゆすって雪を舞わせているようで、それも気まぐれに、あちらの枝、こちらの枝と、目の前の雪原を遊び歩いているようだった。

風といえば、北風なら北風で一方向から吹き続けるイメージがあったが、ここではそうではない。まるで意思をもった生き物のように不連続に動き回るのである。これが春になって草木に葉が繁るようになるともっと不思議な風に出会える。本当にひとつの葉っぱだけが、まるで手を振っているように激しく動くのである。他の葉は微動だにしないのに。

朝起きて雪原を見ると、家の近くまで動物の足跡が残っていることもあった。当時は足跡で誰が来たのかなんてわかるはずもなかったが、足跡を見られただけでちょっと興奮していたのを思い出す。

近くのゴミステーションといっても家からは五百m離れていてそれも坂道なのだが、買ったばかりのソリにゴミをのせて、帰りには自分たちが乗って滑り降りる。そんなことをしていたらあっという間に札幌に帰るときになった。

これは誰

次に竹山に来ることができたのは、ほぼ二週間後であった。

道路や家の周辺の雪は十㎝ほどで除雪はそれほど大変ではなかったが、今度は寒さだった。翌朝の最低気温はマイナス十八度で、そこまで下がると普段は賑やかな小鳥たちの姿もほとんど見られず、シジュウカラが二羽来たぐらいで、シンとして凍りついた静かな風景だった。

札幌のまちなかではあまり記憶にない寒さだと思っていたら、二日後の朝にはマイナス二十一度まで下がった。晴れた日の朝は、放射冷却現象とかで気温がグッと下がるのだ。

そのかわり、厳寒の快晴の朝空はどこまでも透き通り、遠くの山並みが朝日を浴びてくっきりと普段より大きく見渡すことができた。

あまりの寒さに怖気付いたわけではないが、次に竹山に来ることができたのは翌月の半ば過ぎで、三週間以上たってからであった。冬場、それだけ家を空けているとすっかり冷え切ってしまってなかなか暖まらない。ようやく家が暖まったのは二日後だった。その日は朝から快晴で、部屋の中に太陽が低い角度で差し込み家を暖めてくれた。天気が良いとお客さんも賑やかだ。大きな窓の前をキタキツネが悠然と横切っていった。普通、人の気配を感じ取るとサッといなくなりそうなものだが、ちらっとこちらを見たあと、まるで何も見なかったようにゆっくり堂々と立ち去っていった。まあ、ここらの主はそっちなのだから当然か。その日は、アカゲラとシマエナガが同時に居合わせしたりするのも目にすることができた。

遠くに山並みを一望





私たちも天気の良さに誘われて、隣家の友人から新居祝いにいただいたスノーシューを履き初めすることにした。敷地内をぐるっと一周するくらいだが、それでも結構汗ばみ身体が暖まる。よく見ると、斜面の雪が溶け落ちて土が少し顔を出しているところがあった。本格的な雪解けはまだ一ヶ月以上先になるが、それでも少しずつ季節が変わりつつあるようだ。前回来た一月でいえば元旦の日の出が午前七時三分で日没が午後四時十二分。太陽の南中高度も二十四度と低かった。それがこの二月十八日では、日の出が午前六時二十六分で日没が午後五時十一分と、太陽が出ている時間がかなり長くなった。南中の高度も三十五度と高くなっている。一年の半分近くを雪と寒さに閉じ込められる地域にとっては、そのようなわずかな差でも、また、春に一歩一歩近づいていると気持ちが膨らむものなのだ。

もちろん札幌のまちなかにいても、太陽の光が力強さを増しているのは感じられるのだが、竹山に居るとそのことが、生き物たちの動きや場所による雪の解け方などかすかなことからもわかる気がした。

そんなことを感じることができた二月だったが、結局、竹山に来ることができたのはその四日間だけだった。一月は正月休みを長く取れたので十二日ほど滞在できたのだが、二月は年度末が近いせいか十一日間も出張に取られてしまったのだ。

シマエナガを間近に見る

当初の構想は、週末の息抜きに野遊びができる土地を手に入れ、小さな作業小屋でもつくって外を眺めながらお茶を楽しむことができればという程度のことだったのだが。どこでどう魔が差したのか。いつのまにか老後の蓄えを使い果たして、まっとうな住宅を建ててしまった。

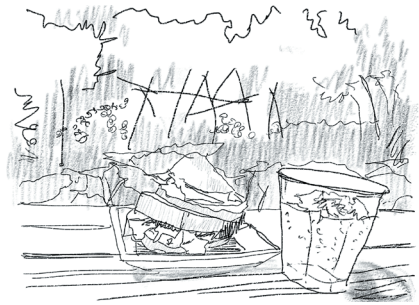
そうなったらなったで週末だけではもったいない。できるだけ長く竹山に居たいとういう気持ちが大きくなった。実際問題として、厳寒期などは週末に訪れても除雪にかかる時間はけっこうなもので、また、冷え切った部屋が暖かくなるのを待つだけで貴重な一日が過ぎてしまう。そして、ようやく落ち着いたと思ったらもう帰り支度をしなければならない。

確かに竹山のこの土地は、ちょっと野遊びで訪れるというのではなく、しっかり腰をすえて日々の風景に目を向ける余裕がないと味わえない魅力があるのは事実だ。

できるだけ竹山に滞在する時間を長くしたくて「竹山オフィスの日」というのを勝手に決めた。そうすると出張に出向くにしても、札幌の自宅よりも高速道路や空港へのアクセスが便利で合理的でもあった。出張の帰りもまちなかのマンションに戻るより、静かで清涼な空気と暗くなりかけた空に木々の黒いシルエットが浮かび上がる景色が出迎えてくれるほうが疲れが癒えた。

ただ、良いこともあればそうでないこともある。

竹山にはラフで自由な服装で行きたいのだが、その足で出張となるとそれなりの服装を持参しなければならない。竹山にお気に入りのジャケットを置いておくことにしたら、今度は札幌に居るときにそのジャケットがないのであわてることになる。それに着替えの問題もある。



外での朝食は楽しかったが





妻は食材の問題に頭を悩ませていた。食べるだけのこちらにはわからないが、そのときの滞在日数に合わせて食べきれる食材をキープし、自宅のマンションとふたつの冷蔵庫の管理もするのは相当苦労したようだ。フードロスに敏感であればなおさらである。

いわゆる二地域居住の部類に入るのであろうがどうも違うようだ。夏の間はこちらで、冬になればあちらでというようなスパンで滞在できれば良いのかもしれないが、一週間の間であちらとこちらというのではあまりにあわただしい。それに三、四日の出張が加われば短期三地域居住の状態になってしまう。

その合間に竹山でしか味わえない生活をと、欲を出そうものなら忙しいことこのうえない。何か田舎暮らし的なことをしたいと思って竹山に居るわけではないが、時間に追われると、ついあれこれしそうになってしまう。

ゆったりとした時間を楽しもうと思っていたのが、かえってあわただしくしてしまっている。完全に目的としたこととやっていることが逆転してしまっている。

そう気づいたときに訪れたのは、三十五年経営して来た会社を後進に譲るという事業だった。

# バトンタッチ

会社の事業承継については、随分前から考えていたことだった。幸い私は良きスタッフたちに恵まれていた。そして彼らに経営をバトンタッチするなら彼らが四十代早々のタイミングでしなければならないと考えていた。それは私が六十五才になるときだと。

なぜ、彼らが四十代早々の時期に事業を譲らなければならないと考えたのか。その理由の第一は若くなければいけないということだった。私が友人のYと事務所を立ち上げたのはちょうど三十才のときであったが、特にどこかの事務所でノウハウを学び独立したということはなく、ほとんど学生から起業したようなものだった。正直、都市計画や建築設計の専門的知識や実務経験は無いに等しかった。ただ、学生時代の十年間近くを歴史的街並みの保存のための住民運動の支援に費やしてきた体験だけが総てであった。それでも、依頼を受けた仕事ひとつひとつを一から考え自分たちなりの解にたどり着くまで、膨大な時間を調べ、考えることに費やすことができたのは若かったことにつきる。

また、経営的に苦しい時期にも、未経験の分野でありながらその分野では先進的な取り組みをチャレンジすることができたのも若かったからできたことだと思っている。

事業承継を考え始めた当時、六十五才になってもまだまだ現役でやれる自信はあったし、それまでの成果を評価していただき私をご指名いただくこともまだまだあったし、新しいチャレンジも怠らなかった。しかし、そのまま七十

事業を継いでくれた三人





とか七十五とかまで私が経営を続けたとすると、後継者たちは五十を優に過ぎてしまう。その年になると、それまでやってきたことには円熟味を増すであろうが、失敗を恐れず自分なりの新しいチャレンジをすることが難しくなってしまうのではないか。仮に失敗したとしても、それを糧に再びたて直す体力、気力があるだろうか。また、社会状況が大きく変わるなど時代の転換期に遭遇したときに、それに柔軟に対応して乗り切ることができるだろうか。

そのように考え、事業承継のタイミングは私が六十五才になるときと決めたのだ。そのためにはバトンを受け取っても良いと思ってもらえる経営状況と実績をつくる必要があったが、それに最後の十年を費やした。

幸いにして、優秀な三人のスタッフに共同代表というかたちでバトンタッチをすることができた。三人はそれぞれに個性的で、得意とする分野や持っているネットワークが異なる。それをひとつのかたちに束ねることができれば私にはできなかった新しい道を開いていけるのではないか。そんな思いでの事業承継だった。

正式なバトンタッチは私の誕生月に合わせて六月末とした。七月に入ると恒例の事務所旅行をかねてスタッフがそろって竹山に来てくれた。天気にも恵まれ敷地の中を案内したり、竹山での暮らしの様子を話したりして時間を忘れた。いい加減酔いが回った頃、事務所を引き継いでくれたN君がぽつりと「石塚さん引退するって本気なんですね。竹山に来てそう思いました」と言った。

竹山にみんなが来てくれた

N君には申し訳ないが、代表を交代した後も私は顧問という肩書きで経営の相談にはのっていた。仕事も私が関わった方が良いと思われるものには現場や打ち合わせに積極的に出向いていた。私としては、私が元気なうちはできるだけ自分の進め方やノウハウを現場をつうじて伝えておきたいという気持ちがあったからだ。それが大きな間違いであることに気づくことになる。

基本的には彼らが中心になって進められるようにしていたつもりではあるが、クライアントとの打ち合わせで方向性が行き詰まったときなどは、クライアントの視線が自然と私の方を向いてしまい、そこでの一言で方向性が決まってしまうことがおきる。また、論点の整理も私が図解するとスムーズに議論が展開する。そのときは「こういう場合はこう考えると良い」と後人に伝えているつもりでも、そういうことが続くと、彼らの試行錯誤の機会や私とは異なるアプローチの可能性を奪っているのではないのかと考えるようになった。

社会はどんどん変化していっているし、それに伴って私の経験はどんどん過去のものになってきているはずだ。そんな経験を伝えるといって次の世代の可能性を閉ざしてはいけない。そんな思いが強くなり八月には完全に現場から退くことを決めた。いろいろお世話になったクライアントに共同代表と伺い、引退の挨拶をさせていただいた。

正確にいうと、どうしても私ご指名の仕事数本と、研修講師については続けることにしたが、それ以外は完全に手を引いたし、口も引いた。おかげで月





のほとんどを竹山で過ごすことができるようになった。

その判断が正しかったことはすぐにわかることになる。彼らは経営スタイルをオープンに変えて全てスタッフ全員の合議で進めることにした。それは、私の目からすると経営判断のスピードが低下し、決定の責任の所在が曖昧になってしまうのではないかと思ったが、彼らはひとつの信念としてそれをやり通した。確かに最初はぎこちない話し合いだったが、そのうち気がつくとスタッフの自主判断、自主提案の機会が増えていっていると感じられるようになった。

また、働く時間も自由裁量制を取り入れ、スタッフに時間の自己管理を促すようにした。何かと打ち合わせや現場調整が多い業務の生産性を高めるために大胆に週休三日制を宣言し、そのうち一日をデスクワークに集中できるようにしたりした。そして一年足らずで若い有能なスタッフを何人も迎え入れ、その分、私の頃より売り上げも順調に伸ばしていってしまったのだ。

そんな彼らのチャレンジは、売り上げ云々より新型コロナウイルスによるパンデミックという事態に力を発揮している。私たちの方法論として、様々な対話をつうじて問題解決の方向性や、解決する力そのものを生むというのが柱にあった。その機会が閉ざされようとしたときに、彼らはチームワークでリモートによる対話システムを構築し、一方でコロナ禍における直接対話の方法もつくりあげてしまった。そしてリモートワークへのシフトに際しても、それまでに培われた自主判断、自主提案の力が大きな役割を果たしていると感じる。

スタッフ全員での合宿

バトンタッチがうまく行ったと実感できるのは先のことになるのだが、八月にお世話になったクライアントの方々に完全に引退することをお伝えして回ったときに、何人かの方からは、後継を信頼して全てを託して身を引いたことを評価していただいた。企業の大小の違いはあるが、引退したといっても引き続き経営に口を出し、それが企業の革新力を失わせている例は少なからずあるようだ。

対外的に引退を宣言したあと、その年度いっぱいは、新経営陣のチャレンジに目を細めたり、眉をひそめたりしながら、残った仕事の現場に関わっているうちに時間は過ぎていった。ただ、年度が改まると状況は一変した。

やることがパタリとなくなったのだ。

そして引退してわかったのは、人は他者をつうじて自己を確認することができ、生きていることも実感できるのではないか、ということだ。誰かがその人を高く評価してくれている。誰かがその人を必要としてる。誰かがその人に感謝をしている。誰かがその人が居てくれることで心が安らぐと言ってくれる。誰かがその人に会うことで笑顔を浮かべる。どんな些細なことでも、他者という鏡に映ることで、自分の存在を確認することができる。引退し他者という鏡を失ってはじめてそう感じたのだ。

もちろん他者を介さなくても自己確認できる力のある人はいるだろう。ただ、自分を振り返ってみると他者から評価されているという実感が、自分という存在がいることを確認できることに強く繋がっていると思われる。特に、長年にわたりまちづくりの仕事に関わってきたからなおさらなのかもしれない。もちろん、まちづくりは私一人で何かができるわけではなく、そこに多くの人々が関わり、それぞれの力を発揮することでまちがより良い方向に変わっていくのだと思う。それでも、不遜かもしれないが、そこに私が関わることによってはじめて何かが生まれたと感じることが少なからずある。それが私を支え、私が生きてそこに存在することの証として認識できたのではないか。

その機会がパタリとなくなったのだ。そのことが私を非常に不安にした。息が苦しくなる感じを覚えたり、気持ちも不安定になった。今まで、まちづくりの仕事をつうじて得てきたものに私自身の存在確認があるとしたら、それが無くなった今は何にそれを求めれば良いのか。

ボランティア活動に深く関わるという道もあるかもしれない。いわゆる趣味の世界に没頭するという選択もあるかもしれない。しかし理由は定かではなかったが、それらはどこかしっくりこなかった。

振り返ってみると今までもそのような不安定な気持ちになったことは二度あった。そして、そのつど大きな決断をして強引に舵を切ることで乗り越えて来たのだった。そして今度で三度目になる。

一度目は、三十才になるあたりで、二度目は、それから二十年後の五十才になるあたり。そしてさらに十五年後の今が三度目。

鏡に映った私